

『69 sixty nine』

村上龍 著 集英社文庫 550円(本体)

あの頃の仲間達に…

会員 早乙女 朋宏 (67期)



1 青春小説の金字塔

当たり障りのない表現をするならば、本書は楽しい小説である。1969年の長崎県佐世保市を舞台に、学校のバリケード封鎖、フェスティバルの開催など作者自身の実体験を基にした自伝的な青春小説である。

作者自身、「これは楽しい小説である。こんなに楽しい小説を書くことはこの先もうないだろうと思いながら書いた」と述べているように、その楽しさは他に類を見ない。

全編通して男子高校生の馬鹿馬鹿しくコミカルな思考や言動が描かれており、この場で引用させてもらえないのが残念でしょうがない。

そこで、以下では、やむなく、本書の「あらすじ」なるものを当たり障り無く説明することにする。

2 あらすじ

ベトナム戦争と学生運動に揺れる1969年、佐世保に住む高校三年生の矢崎剣介(ケン)は、同級生のマドンナ、“レディ・ジェーン”こと松井和子の気を惹くため、友人のアダマこと山田正らと共に、高校をバリケード封鎖しようと奔走する。

バリケード封鎖は成功し、ケンも仲間と達成感を味わうが、結局警察に犯行を突き止められ、停学処分となる。

しかし、その結果、松井和子と接近することに成功した。

停学が明けたケンたちは、今度はフェスティバルの開催に向けて準備をすすめる。

途中、“クラウディア・カルディナーレ”こと長山ミエを誘ったことによって、工業高校の番長に因縁を付けられるも、友人の助けで窮地を脱し、フェスティバルは大成功を収める。

その後、ケンも松井和子とより親密な関係になるが、本格的な交際はまだ発展することなく、翌年の2月に、彼女の一方的な心変わりによって、二人の関係は幕を閉じる。

3 本書の意味付け

残念なことに、本書の舞台となった1969年は、僕はまだこの世に生を受けておらず、作中に出てくる当時の音楽や映画などの固有名詞は、全くピンとこない。同様に、バリケード封鎖やフェスティバルなんかも想像すらできない。

ただ、いつの時代も馬鹿馬鹿しくコミカルな思考や言動は変わらないということ、少なくとも僕自身が過ごしてきた少年・青年時代も、そんな感じだったということ思い出させてくれる。

僕にとっては、そんな大事な小説となっている。

4 おわりに

本稿の執筆には手を焼いた。本書の楽しさをうまく説明するには、どうも下品らしいからだ。当たり障りのない紹介になるならば、本書を選択するべきではなかったのかもしれない。

ただ、弁護士という肩書きを持った以上、安易に「表現の自由」を捨てて、他に逃げるのも良くないと思ひ、本書を紹介することに決めた。

人は生きた環境によって感じ方が違うのだろうが、何も知らずに下品だと断じるのは、どこかで自分たちを高貴な存在だと思っているからではないだろうか。

作者の真意は分からないが、僕は、主人公のケンやアダマのように、これからも思いっきり下品に楽しく人生を過ごそうと思う。その生き方が子どもっぽいと笑われようと、僕はその闘いをやめない。